

# 『桜川』注釈(二)

吉田 健一・松本 麻子

キーワードⅡ 『桜川』、俳諧、風虎、磐城、北村季吟

はじめに

磐城平藩藩主内藤義概(風虎)が、松山玖也に命じて編纂させた俳諧発句集『桜川』の注釈を掲載する。本稿は前号に続いて(二)として五一〇〇句の注釈を行った。底本には大東急記念文庫本『桜川 上下巻』(加藤定彦解説、一九八五年、勉誠社)を用いた。翻刻にあたり、底本の旧漢字、異体字は現行の字体に改めた。底本で仮名書きとなっている言葉の一部を漢字に改め、統一されていない表記は歴史的仮名遣いにし、踊り字を平仮名に改め、濁点のないものは濁点を施した。これらを底本どおりに復元できるように、本文に振り仮名で示した。また、底本の難読字には括弧付きで振り仮名を付けた。同様に、歴史的仮名遣いと異なる表記についても、括弧付きで通常の歴史的仮名遣いによる表記を示した。各句には連番で番号を付した。

引用した和歌と歌番号は『新編国歌大観』、『私家集大成』による。引用した俳諧の句番号は、古典ライブラリーのデータベース「日本文学Web図書館」の中で使用されているものを付した。引用文献においても、一部平仮名を漢字に改め、踊り字を平仮名にし、濁点を補い、漢詩文には訓点を付した箇所がある。今回取り上げた句はすべて新春の句であることから、季語については特に指摘しなかった。「作者」欄の作者名及び作者略歴については、前号に掲載された者は省略し、初出の者についてのみ記し

吉田健一・松本麻子『桜川』注釈(二)

た。大東急記念文庫本『桜川 下巻』巻末の「作者索引」、角川書店『俳文学大辞典』、『誹家大系図 古風談林正風』(雲英末雄編、一九九七年、青裳堂書店、『誹家大系図』は大系図と略)、『寛文比俳諧系人名誉人』(野間光辰、「連歌俳諧研究」十七、一九五八年十二月、名誉人と略)他を参照した。また、『桜川』に入集する句数を挙げた。句集『桜川』については大東急記念文庫本『桜川 下巻』の解説を参照されたい。本稿の注釈は吉田が担当し、松本が最終的な加筆・修正を行った。

〈桜川・春一〉

51 明けてけさ春やたつみのあかり窓

佐野廣重

〔句意〕夜が明けて今朝、立春を迎えました。春が「立つ」ように、辰巳にある明り窓から日が差し込んでいますことです。

〔解釈〕◇明けてけさ 「夜が明けて今朝は」の意。句例に「明けてけさ天下の春や日の御門」(延宝二年(一六七四)歳旦発句集・一七二二・定親)がある。「明けて」は「開けて」を掛け、「あかり窓」の縁語ともなる。◇たつみ 「たつ」は「春立つ」の「立つ」と「辰巳」の「辰」を掛ける。辰巳は南東の意。句例は「声や今朝たつみあがりの謡初」(寛永一八年(一六四一)歳旦発句集・三七六・常知)、「去年はたつみのくつ

ろぎや宿の春」(年代不知歳旦発句集・二七六・宗雅)など多数ある。◇  
あかり窓 採光を目的とした窓。あかりとり。句例に「月の鏡家にいれけりあかり窓」(続山井・四一二七・可云)がある。

〔作者〕佐野広重(陸奥・岩城) 一七句。

52 礼帳や起きて数ふる今朝の春

岡田歩滞

〔句意〕礼帳に書かれた年賀客の名を起きて数えている、新春の朝であることです。

〔解釈〕◇礼帳 年賀客が署名する帳面。元旦から三日間、玄関に記帳台を据えて筆硯とともに置いた。句例に「礼帳は今朝右筆の吉書かな」(貞徳誹諧記・五四〇・之数)がある。◇起きて数ふる 同じ言い回しの和歌の例に「伏して思ひ起きて数ふるよろづ代は神ぞ知るらむわが君のため」(古今集・賀歌・三五四・素性)がある。君の御代の長からんことを願う古今集歌に対して、礼帳に書かれた年始客の数を朝起き出して真つ先に数える点におかしみがある。◇今朝の春 新春の意。句例は「今朝の春は鸚鵡がへしか酉の年」(犬子集・三四・正章)、「何のかのと身祝ひをする今朝の春」(崑山集・七九)などがある。

〔作者〕岡田歩滞(国不知) 一句。

元日子日なりければ

53 子にふして子にも起くるや今朝の春

那波不觚

〔句意〕元日が子の日なので、子の刻に寝たけれど、子の日に起きる今年の元日です。

〔解釈〕◇子 前書きとの関係で、二つの「子」はいずれも「ね」と読む。大晦日の子(午後一時〜午前一時)の間に休んだけれど、不思議なことにもまた子(の日)になってから起きたという句。「老人や子に伏し寅

に置き火燵」(時勢粧・一四六九・斎藤親盛)◇ふして…起くるや 「ふして」と「起く」を結んだ和歌に、「伏して思ひ起きて数ふるよろづ代は神ぞ知るらむわが君のため」(古今集・賀歌・三五四・素性)がある。句例としては「伏して思ひ起きてかろひや竹の雪(崑山集・七一〇七・吉治、ほぼ同じ句が『貞徳誹諧記』七二五に光弘の句として見える)、「伏して思ひ起きて忘れずいとしがり」(時勢粧・四四三四)などがある。

〔作者〕那波不觚(山城・京) 二句。

54 楽に寝て閑に起くるぞ今朝の春

宮川弘永

〔句意〕ゆったりと寝て、のどかに起きることで、今年の新春は。

〔解釈〕◇楽に ゆったりと苦も無くの意。本句と趣向の類似した句例に「楽に寝て楽に起きたり今朝の春」(寛文八年(一六六八)・歳旦発句集・一二四三・道寸)がある。「万民の寝覚めも楽や今朝の春」(年代不知歳旦発句集・二六九・倫員)などのように、新春を「楽」に迎えると詠む例がある。◇閑に のどかに。ゆったりとしてのどかな様子。「をん候か天地長閑き今朝の春」(正保三年(一六四六)・歳旦発句集・四五二・立圃)。

〔作者〕宮川弘永(摂津・大坂) 二句。

55 物まうや寝ぬに目ざます今朝の春

関口正武

〔句意〕年始客のごめんくださいの声が、寝てはいないが目を覚めさせるように響く、新春であることです。

〔解釈〕◇物まうや 「物申す」の略。ごめんくださいの意。主に男性が用いた。句例は「物まうはどれから来るぞ今日の春」(犬子集・三七・重頼)など多数ある。◇寝ぬに目ざます 寝てはいないが、目を覚まさせるような声の意。和歌の例に「まこもかる美津のみまきの夕まぐれ寝ぬに目

ざます時鳥かな」（ささめじと・八四・慈円、三体和歌に所収「寝ぬに目ざむる」）がある。これを本歌として、「時鳥」ではなく新年の「物まう」の声が目覚まさせるように響き渡ると詠んだ。句例としては「ひらきては寝ぬに目覚ます眼皮かな」（境海草・二九五・季吟）などがある。

〔作者〕関口正武（撰津・大坂） 六句。

## 56 ひととせや夜部の一時けさの春

山本西部

〔句意〕 昨年は夜の間の短い間に過ぎ、今朝の立春を迎えました。

〔解釈〕 ◇ひととせ…一時 「一時」は短い間。『古今集』「ふるとしに春たちける日よめる／としのうちには春は来にけりひととせを去年とやいはむ今年とやいはむ」（春歌上・一・在原元方）の歌例を参考に、昨年は夜の間の一時だけで、今朝はもう立春を迎えた、の意か。「ひととせ」と「ひととき」が似た音であることからの言葉遊び。「ひととせ」と「一時」を結んだ和歌の例に「ひととせにただ一時の春にだになほ咲きたえぬ花ぞかなしき」（伏見院御集・三〇九）がある。◇夜部 「よべ」と読み、夜の意。句例に「昼寝もや夜部見し月の舟心」（時装粧・一三九一・松本惟庸）、「節分は夜部のなん時今朝の春」（延宝二年（一六七四）歳旦発句集・一七四〇・貞竹）などがある。

〔作者〕 山本西部（山城・京） 慶長十五年（一六一〇）〜天和二年（一六八二）か。本名西武。通称綿屋九郎左衛門、別号は無外軒・風外軒・無外斎。貞徳門。三句。

## 57 宵の年やかねてしるしも今朝の春

今村盛信

〔句意〕 大晦日が過ぎ、かねてはつきりしていた通りに新年を迎えました。

〔解釈〕 ◇宵の年 大晦日の夜のこと。句例に「宵の年の舞は三番能二

番」（新增大筑波集・六・長頭丸）、「宵の年やたつた一夜で花の春」（寛文十一年（一六七一）歳旦発句集・一五二六・青嶂）などがある。◇かねてしるしも 前もってはつきりしているの意。和歌の例に「わが背子が来べき宵なりささがにの蜘蛛のふるまひかねてしるしも」（古今集・墨滅歌・一一一〇・衣通姫）がある。衣に着いた蜘蛛のふるまいから待ち人が今宵来るのは明らかだという意味で、これが本歌である。恋人が来るはずだと詠む本歌に対して、新春がかねてからの兆候のようにやって来たとした。この歌を本歌とする句に「ふる前や兼てしるしも花の雨」（誹諧独吟集・九〇九・安静）などがある。

〔作者〕 今村盛信（武蔵・江戸） 一句。

## 58 去年や何と物とするまに今朝の春

大坂住常省

〔句意〕 過ぎ去った年を「何となく」などと言っているうちに、何事もなく新年を迎えました。

〔解釈〕 ◇去年 過ぎ去ったばかりの前年を振り返って言う語。句例に「去年やきし畠の雪はみなきえて」（塵塚誹諧集・六三二）、「古今とも去年や伝受の三ケ日」（年代不知歳旦発句集・三四三・竹友）など。◇何と物と 「何となく物ぞかなしきすがはらや伏見の里の秋の夕ぐれ」（千載集・秋歌上二六〇・源俊頼）の歌例のように、「何となく物…」と表現し、何となく哀しい、心が乱れると詠む歌例は多い。ここでは「何となく物…」の表現を「何」とか「物」とか言っているうちに、としたものか。わずかな句例に「さし俯いてしばしるにけり／何と物と口もとにある事ながら（調泉子）」（江戸広小路・七九六／七九七）。「何と物」は「何ともなし」を掛けるか。

〔作者〕 長瀬常省（撰津・大坂） 一句。

寛文八年申三月上旬

59 鳥（子）既に注進するや今朝（け）の春

小西似春

〔句意〕鳥はすでに朝を告げており、今朝の新春を迎えました。

〔解釈〕◇寛文八年 一六六八年。戊申。◇鳥既に注進する 「鶯／鷓既に鳴いて忠臣（あ）且（た）を待つ、鶯いまだ出でずして遺賢谷に在り」（和漢朗詠集・六三・鳳為王賦）に拠る表現。「注進」は出来事を急いで報告すること。句例に「高名を軍場（い）よりも注進し」（新增犬筑波集・一四三〇・貞徳）がある。『和漢朗詠集』の「忠臣」を、朝が来たと告げる「注進」と取りなしたもの。鷓はすでに朝を告げており、今朝の新春を迎えた、と詠む。

〔備考〕『時勢粧』に「鳥すでに注進するや今朝の春」（一五四四）同一句が載る。

〔作者〕小西似春（山城・京） 六〇句。

60 今朝や人の目たつべかんめる春霞（はる）

検校重都

〔句意〕元日の今朝、人が目を見張るにちがいない春霞が立ちました。

〔解釈〕◇今朝や：霞 「今朝」と「霞」を結んだ句に「今朝や春あつさりさつと一霞」（慶安二年（一六四九）歳旦発句集・五二二・季吟）、「今朝ぞ雲居霞や屠蘇の酒ならん」（慶安二年（一六四九）歳旦発句集・八四七・令徳）などがある。◇目たつ よく見る、注目するの意。「たつ」は「春立つ」の「立つ」を掛ける。◇べかんめる 推量の助動詞「べし」の連体形と推量の助動詞「めり」を合わせた「べかるめり」の連体形。「…に違いないようだ」の意。句例は「皆人や目だつへ瓶（か）の柳髪」（続山井・一七九八・退歩）がある程度で、和歌・俳諧を通じて用例はこれ以外に見出せない。

〔作者〕住山検校重都（加賀・大聖寺） 二句。

寛文五年巳五月下旬

61 剃りたてや今朝（け）あらたまの春の色

早川正治

〔句意〕きれいに剃ったばかりなので、頭が装いの改まった新春の色になりました。

〔解釈〕◇寛文五年 一六六五年。乙巳。◇剃りたて 剃ったばかりであること。正月を前に頭を剃ったのであろう。句例に「剃りたてのさかやき見ゆる雲晴て」（蛇之助五百・四八二）、「地藏ぼさにはほれけもぞさす／剃りたてしおぐしにあつく綿をきて（貞室）」（玉海集・三六九〇／九一）などがある。◇あらたまの 「年」、「月」、「春」に掛かる枕詞。また、「あらたま」と「新頭」、「改まる」を掛ける。「あらたま」と「春の色」を結んだ和歌に「あらたまの年の千とせの春の色をかねてみかきの花に見るかな」（新拾遺集・賀歌・六八八・藤原定家）がある。なお、「あらたま」を用いて新年を詠む歌例は古く『万葉集』に「あらたまの年行きがへり春立たばまづ我が宿に鶯は鳴け」（巻二〇・四四九〇・大伴家持）があり、句例も「あらたまの年の頭（か）や鳥甲（と）」（犬子集・九・興之、崑山集に同一句）、「祝へ今朝あら玉たま緒のくすり酒」（崑山集・一三三三・吐笑）など多数ある。

〔作者〕早川正治（摂津・大坂） 二句。

62 今朝（け）は春いたつて青し雪の色

盲目是誰

〔句意〕新春があまねくやって来て、これ以上ないほど春にゆかりの青の気配を感じさせ、雪の色もそう見えるほどです。

〔解釈〕◇春：青 春と青は五行説ではいずれも「木」に配当される関係の深い語である。両者が出てくる句例に「来る春の色もや青き丑の年」（延宝元年（一六七三）歳旦発句集・一五五七・了味）、「君に今朝青き

目見えや青の色」(延宝二年(一六七四)歳旦発句集・一七七八・忠幸)などがある。◇いたつて青し 「春至つて」と「いたつて青し」を掛ける。「至りて」には、「余すところなく」の意味があるので、「春至つて」は「春があたり一面残すことなくやつて来て」、「いたつて青し」は「青でないところがないほどに青い」の意味であろう。句例は後代のものに「難波方いたつて長き月夜哉」(龜世・六三)がある。◇青し：雪の色 「青」と「雪」を結んだ歌例に「芳野山みねのあさけの桜花松の葉青き雪かとぞ見る」(壬二集・二〇四一)があるが、これは松の葉を青い雪の色と見立てたものである。雪そのものの色を青と詠んだ例は、和歌にも俳諧にも見出せない。

〔作者〕 盲目是誰(讃岐・高松) 二句。

### 63 春やけさ人更に若き事始め

小西似春

〔句意〕 新春を迎え、「人更に若きことなし」の詩ではありませんが、時を惜しんで事始めをしています。

〔解釈〕 ◇人更に若き 『和漢朗詠集』に「人更かきねて少わかきことなし、時すべからく惜しむべし、年常に春ならず、酒を空しくすることなかれ」(四七・小野篁)とあり、本句はこの詩句に拠る。この詩句に拠る俳諧の例に「人更にげにや六月ほととぎす」(句兄弟・四三・宗因)がある。◇

事始め 新しく事を始めること。新年の事始め。句例は「正月やまたば来んとの事始」(時勢粧・二二一八・維舟)、「立年やあらかじめする事始め」(明暦二年(一六五六)歳旦発句集・七二四・賀近)など多数ある。

〔作者〕 小西似春(山城・京) 六〇句。

### 64 霞しくやけさ東君の八重畳

秋田住少蝶

〔句意〕 霞がたなびいて、新年を迎えた今朝、春の神が八重の畳のような

霞の上にお座りになっています。

〔解釈〕 ◇霞しく 霞が、敷いたように立ちこめること。歌例に「霞しく春の潮路を見渡せばみどりをわくる沖つ白浪」(千載集・春歌上・八・藤原兼実)、「霞しく今朝さへさゆる袂かな雪ふるとしや身にとまるらん」(六百番歌合・二〇・藤原隆信)などがある。俳諧には「霞しく」を用いた例は見出せない。◇東君 春の神。句例に「出る日や世に東君のお年玉」(慶安元年(一六四八)歳旦発句集・四九一・空存、ゆめみ草に同一句)、「東君や日もあら玉の光君」(寛文四年(一六六四)歳旦発句集・九六七・似空)などがある。◇八重畳 八重に敷いた畳。万葉集などに少数の用例が見えるものの、和歌や俳諧の例は少ない。「八重」については、『古事記』の「八雲立つ出雲八重垣妻籠みに八重垣作るその八重垣を」以来、多数の用例がある。また、「八重霞」についても、「難波渦かりふく芦の八重霞ひまこそなけれ春の明ぼの」(新後撰集・春歌上・三五・藤原為氏)や「思ふ中や垣する花の八重霞」(犬子集・四〇八・重頼)、「佐保姫の九花の帳か八重霞」(崑山集・五四六)など、多数の歌例、句例がある。

〔作者〕 秋田住少蝶(出羽・秋田) 平賀氏常福院、出羽秋田野代住人、桂葉息立圃門人(名譽人) 一句。

### 65 君か代に出し竜馬か今日の春

北村季重

〔句意〕 あなた様の御代に現れた竜のような馬が駆ける新春がやって来ました。

〔解釈〕 ◇君が代 あなた様の代。句例に「君が代や鳥おどろかぬはり鼓」(寛文元年(一六六一)歳旦発句集・八五五・良保)、「とぎたる太刀ぞ鞘におさむる／君が代に文を作るはあらめでた(維舟)」(時勢粧・六七四一・六七四〇)などがある。◇竜馬 竜のような素晴らしい馬。読みは「りうめ」か。句例は「雲路をやかくる竜馬の杳代鳥」(玉海集・一一

一九・宗興)など、少数の例があるだけである。なお、「竜馬かけふ」は「竜馬か今日」と「駆け」を掛けるか。

〔作者〕北村季重(山城・京)。本名は湖春。季重としては一句の入集。

66 礼をもつてせざんばあらじ今日の春

井出正倫

〔句意〕正しい礼儀作法で対応しなければなりませんね、今日の新春の日を迎えたことです。

〔解釈〕◇礼をもつて 『論語』には為政第二の「之を道くに徳を以てし、之を齊ふるに礼を以てすれば、恥づる有りて且つ格る」など、「礼を以て」という言い方が数か所ある。本句は論語の慣用句を用い、新年を迎えるにあたって正しい礼儀作法で対応しなければならないことを言ったものか。「礼をもつて」という言い回しは、歌例・句例ともに見出せない。◇せざんばあらじ しなければなるまい、の意。用例は見当たらない。◇礼：今日の春 「礼」と「今日の春」を結んだ句例に「我年も礼儀にたつや今日の春」(年代不知歳旦発句集・三〇〇・方孝)、「天下皆礼を知れりや今日の春」(ゆめみ草・四七・重義)がある。

〔作者〕井出正倫(陸奥・岩城) 一三句。

寛文十一年亥二月上旬

67 御慶とや礼のうなづく今日の春

江口塵言

〔句意〕年始のあいさつというのでしょうか、ご挨拶を受けたら礼をもつてうなづく新春となりました。

〔解釈〕◇寛文十一年 一六七一年。辛亥。◇御慶 新年のあいさつの言葉。新年の季語。句例に「行成紙に筆ころむる／年玉も玉の台の御慶にて(維舟)」(時勢粧・六四一一・六四一〇)、「君たれば臣も新春の御慶哉(承応元年(一六五二)歳旦発句集・五八四・重頼)などがある。◇

礼のうなづく 年始の礼に対してうなずいて返すこと。句例に「としとひのうなづきあふや今朝の春」(新続犬筑波集・春発句上・二三五七)がある。

〔備考〕同一句が『時勢粧』(一五三五)に載る。

〔作者〕江口塵言(陸奥・二本松) 一〇八句。

68 しめ飾りわらかなれや今日の春

枳任口

〔句意〕藁製のしめ飾りのように快活であつてほしいと祈る新春を迎えました。

〔解釈〕◇しめ飾り 正月の飾り物である注連飾りのこと。句例に「幾春もその名は朽ちぬしめ飾り」(万治二年(一六五九)歳旦発句集・八〇・一墨)、「しめ飾り幾千代かけて結び松」(延宝二年(一六七四)歳旦発句集・一七七九・一房)などがある。◇わらかなれや 陽気なさま、快活なさまを表す。『源氏物語』『野分』に「まみのあまりわらかなるぞ、いともしなたかくみえざりける」とある。和歌・連歌・俳諧ともに用例が見当たらない。なお、「わらかな」の「わら」は「藁」を掛ける。

〔作者〕枳任口(山城・伏見) 七八句。

69 節目の詳らかなり今日の春

常用由可

〔句意〕節目がはっきりとわかることです。今日、年の初めの新春を迎えました。

〔解釈〕◇節目 ふしめ、の意。「せつもく」とする用例は、和歌、俳諧ともに見出せない。「ふしめ」とした用例もわずかで、「今年生の女竹男竹やふし夫婦」(続境海草・二六九・意朔)がわずかに見える。◇詳らかなり はっきりとわかるさま。これも、和歌、俳諧ともに用例は見出せない。

〔作者〕常用由可（下野・宇都宮） 一句。

70 長生きは無用の用なり今日の春

釈任口

〔句意〕長生きは役に立たないどころか、大いに役に立つこともある。そんなことを知った今年の新春です。

〔解釈〕◇長生き 句例に「長生きや桃に咲きあふうば桜」（崑山集・二二六六・養卜）、「長生きの身ぞ種となる花の春」（貞徳誹諧記・五一・未得）などがある。◇無用の用 役に立たないとされているものが、かえって大切な役をすること。出典は『莊子』「人間世」篇。句例に「雪の朝無用の用をにくみけり」（誹諧坂東太郎・七〇〇・調和）がある。「無用」を用いた句には「いんぎんも舟のうちには無用にて」（守武千句・二四九）、「長ばなし無用と告ぐる松の風」（大坂桜千句・二七・益翁）などがある。

〔作者〕釈任口（山城・伏見） 七八句。

71 はじめ終はりおかしきや歳暮けふの春

内海安重

〔句意〕始めから終わりまで趣深いことです。年の暮れを迎え、今日は新春を迎えました。

〔解釈〕◇はじめ終はり 「初めと終わり」の意。ここでは大晦日と元旦のこと。歌例に「はじめから山と心にせばくともをはりまてやはかたくみゆべき」（赤染衛門集・二四七）、「ながき夜のはじめをはりも知らぬ間にいくよの事を夢に見つらん」（続拾遺集・雑歌下・一一二六六・花山院）、「人丸の影供養とて人の申せしに、初春／くり返し春は来にけりあらたまのはじめをはりもなき年のをに」（亜槐集・第三類本三）などがあり、句例には「はじめ終はり程とぎれずの声もがな」（毛吹草・一一八四・永治）などがある。◇歳暮 年の暮れ。「暮れ」を「をかし」とした後代の

句例に「おかしうて腹が立つなり歳の暮」（其便・八〇五・泥足）がある。

〔備考〕寛文八（一六六八）年の『歳旦発句集』（一一一九）に同一句が載る。

〔作者〕内海安重（山城・京） 梅盛門、内海氏、通称治兵衛、名光重、不求子、宗恵従弟（大系図） 一句。

72 けふ春や都も江戸もどちもよし

山岡元隣

〔句意〕今日は新春を迎えました。京の都も江戸もいずれ劣らぬ良い所です。

〔解釈〕◇けふ春や 「けふ」は「京」と「今日」を掛ける。「今日春」は「今日の春」の略で、新春のこと。「けふ春や」全体では、「京の都が新春を迎えた」の意。◇都も江戸も 都と江戸がともに詠まれる句の例に、「江戸桜東にしきの都かな」（時勢粧・二〇二二・維舟）、「のまれけり都の大気江戸の秋」（のまれけり）歌仙・一・春澄）などがある。

〔備考〕寛文七（一六六七）年の『歳旦発句集』（一一四四・元隣）には、「いはふ春や都も江戸もどちもよし」の句形で載る。

〔作者〕山岡元隣（山城・京） 寛永八年（一六三二）〜寛文十二（一六七二）。字は徳甫、別号は玄水・而愠斎・抱甕斎・洛陽山人。季吟門、四句。

73 君か代や所もところ江戸の春

山岡元隣

〔句意〕あなた様の代で一番栄えている場所はほかでもなく江戸、ここに新春が訪れました。

〔解釈〕◇所もところ 「ほかでもなくこの場所」の意。歌例に「秋もあき今宵もこよひ月も月とところもところ見る君もきみ」（後拾遺集・秋上・

二六五・よみ人しらず)があり、本歌とみなせる。句例には「菓子に出せ野老もところ客も客」(境海草・二六〇・盛之)、「律義者の下屋敷にて月の会/所もところ和歌も身にしむ(意楽)」(大阪独吟集・三四八/三四九)などがある。◇江戸の春 句例は「蓬萊の山また山や江戸の春」(時勢粧・五二二・日野好元)、「よべ芝にこもりて今朝や江戸の春」(誹諧当世男・三・未調)など多数ある。

〔作者〕山岡元隣(山城・京) 四句。

### 74 世のおほえ花やかなりや江戸の春

長坂守常

〔句意〕世間の評判も華やいだものなのでしよう、江戸は花の春を迎えました。

〔解釈〕◇世のおほえ 世間の評判。世の人々の評価。用例は和歌、俳諧ともに見いだせない。◇花やかなりや 華やいでいること。「花」は「江戸」にも掛かる。句例に「花やかにおどす具足も仏胴」(貞徳誹諧記・四四九・一雪)、「花やかに立つる社の御託宣」(宗因千句・八二二)などがある。

〔作者〕長坂守常(陸奥・岩城) 一五二句。

### 75 治るや溶々として江戸の春

矢吹嘉品

〔句意〕世の中がよく治まっていることです。江戸は水が静かに流れてるように静謐な新春を迎えました。

〔解釈〕◇治るや 国や藩などがよく治まっていること。句例に、「治るやゆるり関東の御代の春」(貞徳誹諧記・五五二・一貞)、「治るや天下第一の君が春」(年代不知歳旦発句集・二九九・為親)などがある。◇溶々として 水の静かに流れるさま。新年の早朝、平安で静かな江戸の町を表したものの。「池の色溶溶として藍水を染む、花の光焰焰として火春を焼

く」(和漢朗詠集・一一四・白居易)。後代の句例に「春とも言はぬ火屋の白幕(桃鯉)/やうやうと峠にかかる雲霞(水)」(「此里は」歌仙・元禄四年十月・一八/一九)などがある。

〔作者〕矢吹嘉品(陸奥・岩城) 八九句。

### 76 慈悲の波四海に立や江戸の春

吉田聞也

〔句意〕為政者の恩沢が波となって周囲の海に立つ中、江戸が新年を迎えました。

〔解釈〕◇慈悲の波 為政者の恩沢が波のように一般民衆の上に及んでいくこと。「慈悲の波」の用例は、和歌、俳諧ともに見出せない。「慈悲の海」の例として、後代のものに「大慈悲の海やひとつに霜あられ」(俳諧勸進帳・五九)がある。「慈悲」の句例は多く「我身ながらも尊くぞある/天下さま御慈悲ふかき代に合ひて(貞徳)」(新增犬筑波集・一三九一)などがある。◇四海 周囲の海。句例に「治りて四海一也けふの春」(慶安二年(一六四九)歳旦発句集・五〇八・成次)、「四海波やしづまり帰る御代の春」(ゆめみ草・一四・宣安)などがある。

〔作者〕吉田聞也(陸奥・岩城) 八七句。

### 77 よせ砂か富士を飾りの江戸の春

水野林元

〔句意〕砂を寄せてこしらえたのでしうか。縁起物のような富士を飾る江戸に、新春がやって来ました。

〔解釈〕◇よせ砂 砂を寄せて縁起物などの姿を作ること。句例に「よせ砂やここも高砂門の松」(時勢粧・一〇一二・買嘲)がある。なお、類似した「立砂」については、15を参照。◇富士を飾り 富士山のそびえるさまを正月の飾り物と見たた。「蓬萊やここに飾りて伊勢の富士」(阿蘭陀丸二番船・二・風鈴軒)。



〔作者〕水野林元（陸奥・二本松） 二〇一句。

78 武蔵野は富士を磁石や江戸の春

風山

〔句意〕武蔵野は富士山を方位計の針にしているのでしょうか。東の江戸では新春を迎えました。

〔解釈〕◇武蔵野：富士 両者が出てくる和歌に「武蔵野もさすがはてる日数にや富士のねならぬ山も見ゆらん」（新後拾遺集・羈旅歌・九二一・宗久）、「富士のねをふりさけみれば白雪の尾花につづく武蔵のの原」（新後拾遺集・羈旅歌・九二二・藤原長秀）などがある。句例に「武蔵野の雪ころばしか富士の山」（大子集・一四一一、塵塚誹諧集・七三七及び、毛吹草・二八五にほぼ同一の句が見える）、「武蔵野や富士を尾花が袖の内」（時勢粧・一六・維舟）などがある。◇磁石 磁気コンパス、磁気羅針盤の俗称。句例に「旅だたん方角をよくつつしみて／磁石の針をもつ舟の中（定清）」（誹諧独吟集・七四三／七四四）、「めぐれるは磁石の針か北時雨」（続山井・五一七四・道之）がある。富士山の形を磁石に模した表現。

〔作者〕風山（陸奥・岩城）風虎の別号。 一〇一句。

79 馬車武陽に入や江戸の春

浅香研思

〔句意〕正月用の物資を載せた馬車が武蔵国に次々と入ってくる江戸の新春です。

〔解釈〕◇馬車 うまぐるま。主に物資の輸送に用いられた。歌例に「如月の今日のはじめの馬車いなりの山の道ぞさか行く」（雪玉集・四二六三）、「賀茂山やたつる使の馬車道もにぎはふ今日の神事」（為村集・五四一）などがある。また、句例に時代は下るが「馬車さはらぬ江戸の師走かな」（夜半亭発句帳帖・二八五）がある。◇武陽 江戸を含む武蔵国のこ

と。歌例、句例は見当たらない。「武」は「馬」の縁語。

〔作者〕浅香研思（陸奥・岩城） 一一〇句。

80 芝海老や有り数にせん江戸の春

松村吟松

〔句意〕江戸の海で獲れる芝海老のように、あなた様の年齢を数えきれない数としたいものです。この江戸の新春に。

〔解釈〕◇芝海老 江戸の海に多産する小型のエビ。句例に「芝海老やもみぢを閉づる網の糸」（江戸広小路・三二三・不卜）がある。◇有り数にせん ありかず。人や物のある数のこと。年齢に用いることが多い。歌例に「わたつ海の浜の真砂を数へつつ君が千歳の有り数にせむ」（古今集・賀歌・三四四・読人しらず）がある。これは、あなたの年齢を浜の真砂のように数えきれないほどの歳である千歳といたしましょう、という意。本句はこの歌を踏まえ、君の千歳を真砂ではなく芝海老の「有り数」にした点が眼目。俳諧の例に「鯛の子も有り数の世や若多びす」（時勢粧・五三一・田中重道）、「君が代のあり数の子や千々の春」（年代不知歳旦発句集・二三三・長好）などがある。

〔作者〕松村吟松（武蔵・江戸） 四〇句。

81 芝海老や入口飾る江戸の春

江口塵言

〔句意〕芝海老を供え物として家々の入り口を飾っている、江戸の新春がやって来ました。

〔解釈〕◇芝海老 80参照。芝海老を正月飾りに用いたか。海老は長寿を言祝ぐ縁起物。◇入口 家々の入り口。句例に「茂りてぞ入り梶子の木幡山」（続境海草・二五三・巽翁）、「月待つとひらけば風の入口に／来たやらにほふ露のふり袖（可頼）」（玉海集・三〇一七・三〇一八）などがある。◇飾る 正月飾りに関連した句の例として、「台に今朝飾る鏡やもち

道具」(崑山集・一九五・道節)、「門々に飾るや花の都草」(明暦三年  
一六五七)歳旦発句集・七三五・流味)、「海老のあるは戸ざせる門の  
飾かな」(続山井・一三三三・常信)などがある。

〔作者〕江口塵言(陸奥・二本松) 一〇八句。

### 82 蓬萊は東国宝山や江戸の春

板倉吉頼

〔句意〕蓬萊と呼ばれる富士山は何といつても東国の宝山です。その飾り  
物のような富士山が美しい江戸に新春がやってきました。

〔解釈〕◇蓬萊 この語には富士山の異称及び江戸城の異称としての用法  
があるが、ここでは宝山とあるので、富士山のことであろう。句例に「蓬  
萊の山も今日こそは神の春(時勢粧・一四五・浜田春良)」、「蓬萊の山下  
庵や門の松」(寛文十年一六七〇)歳旦発句集・一三四七・正長)など  
がある。◇東国宝山 富士山が東国の宝の山である、の意。「東国」は歌  
例・句例ともに少なく、和歌の例に「唐国におりけることはいさ知らず東  
国の奥に生うる石竹」(蔵玉集・四〇・源俊頼)がある程度。俳諧の例も  
「東国武士の狩は秋山／すがりつく紅葉衣の色にまどひ(維舟)」(時勢  
粧・五九三四／五九三五)や、後代の「東国は一夜泊りもなさけあり」  
(句兄弟・一八六)などあるが少ない。「宝山」も「ほうざん」という読  
み方では用例が見出せないが、「宝の山」の形で「露や玉宝の山路こがね  
ぎく」(続山井・四三八五・直政)、「おらずんばむなし宝の山桜」(毛吹  
草・二〇六及び八七四)などがわずかに見出せるだけである。

〔作者〕板倉吉頼(美濃・竹ヶ鼻) 梅盛門、板倉氏、不驕軒(大系図)  
三七句。

### 83 今朝やくる千寿万歳江戸の春

由井雪柴

〔句意〕今朝、やって来るでしょう。千寿万歳が江戸の新春を寿ぎに。

〔解釈〕◇千寿万歳 せんずまんざい、または、せんじゅまんざい。千寿  
万歳(千秋万歳)は平安時代に起り、鎌倉・室町時代を経て、江戸初期に  
かけて行われた正月年頭の祝言の芸能及びその縁者をいう。家々を訪ね  
て、その庭先や門口で一家の繁栄を願う口上や芸を披露し、謝礼を得た。

千寿(秋)万歳を詠んだ歌例に「春の庭に千秋万歳いはふより花の木根  
はさしきかへなむ」(三二番職人歌合・一)、「たちまへる千秋万歳いづく  
にもけしきばかりの祿ぞかひなき」(三二番職人歌合・三三)がある。句  
例には「たたみかけてくる春やわが老の皴／末広かざす千寿万歳(可  
全)」(続山井・七／八)などがある。

〔作者〕由井雪柴(武蔵・江戸) 宗因門、小坂井氏または由比氏とも。  
通称庄左衛門(大系図)一句。

地震治りし年

### 84 とこしなへに揺り治まるや四方の春

半井慶友

〔句意〕地震の揺れが収まり、世の中も永久に治まる新春がいたる所にや  
ってきました。

〔解釈〕◇地震治まりし年 寛文二(一六六二)年五月の「近江・若狭  
地震」をいうか。◇とこしなへに とこしへに、と同じ。永久に、の意。  
歌例に「岩だたむ山のかたその苔筵とこしなへにも物思ふかな」(夫木抄  
・一三三二一・藤原俊成)、句例に「とこしなへ爪の燭火朧々と」(軒端  
の独活・四二一・嘯)などがある。◇揺り治まる 地震の揺れが収まるさ  
まと、世が治まるさまをいう。「大地震ゆりわか丸の夢覚て」(物種集・  
九九二、又は二葉集・六二八・西鬼)。◇四方の春 いたる所に春が訪れ  
ること。句例は「あら玉や面向不背四方の春」(崑山集・二九八・重  
成)、「我も人も天地もしるや四方の春」(崑山集・三二七・正継)など多  
数ある。

〔作者〕半井慶友(武蔵・江戸) 三句。

85 日のはじめ暖かなるや国の春

松井重規

〔句意〕冬だというのに一日の始めが暖かい。国中がそんな新春を迎えました。

〔解釈〕◇日のはじめ 一日の始め。特に、元日の始め。歌例に「我ながらかくれあるべき恋すとは日のはじめより思はざりしぞ」（新撰和歌六帖・一三九〇）、また句例に「日の始祝へ十二の鏡餅」（寛文年（一六六四）歳旦発句集・一〇〇一・正倫）などがある。◇暖かなるや 歌例に「吹く風も暖かならず寒からで霞みくらせる春雨の空」（夫木抄・九六二・藤原行家）、句例に「雲の上にも湯やわかすらん／暖かな春の雨水いげ立て（貞徳）」（新增犬筑波集・六三七／六三八）などがある。◇国の春 句例に「仁を以て民したがふや国の春」（貞徳誹諧記・五二七）、「かざり松や家とのへば国の春」（時勢粧・五三五・風虎）などがある。

〔作者〕松井重規（陸奥・岩城） 二二六。

86 道やそれ<sup>其</sup>一つを守る国の春

平住如風

〔句意〕一つの道を守る国に、春がやって来たことです。

〔解釈〕◇道やそれ 道であることよ、の意。「それ」は感動詞的に用いる。類似した言い回しに「暁恋／月やそれほの見し人の面影をしのびかへせば有明の空」（秋篠月清集・三六五）など、「：やそれ」にはさまざまな組み合わせがある。◇一つを守る 一つの道を守る。「道」と「守る」を結んだ和歌の例に「守るらむ道をも代をも住吉の宮居におなじ玉津しま姫」（内裏九十番歌合・一六〇・堯尋）、「人心あらそひなきを守る世や国をさまりて道を知るらん」（雪玉集・六五七二）がある。

〔作者〕平住如風（陸奥・岩城） 九句。

87 寛文十二年に  
寛文や十二街中国の春

河路繁常

〔句意〕寛文の時代も十二年を迎えました。御城下の町すべてに新春の気分が満ち溢れています。

〔解釈〕◇寛文十二年 一六七二年。壬子。◇寛文や この年号を詠み込んだ句に「寛文や七つの今年読始」（時勢粧・一〇二〇）、「寛文や七年よろし今日の春」（寛文七年（一六六七）歳旦発句集・一一六七・空存）などがある。◇十二街中 『和漢朗詠集』に「十二廻の中に、此夕の好きに勝りたるは無し、千里の外に皆わが家の光を争ふ」（二四四・紀貫之）とある。「十二廻」は一年間に月が運行する回数を指すことから、十二箇月をいう。本句はこの言葉を模して「十二街」としたか。だとすれば、「十二街」はすべての街という意か。

〔作者〕川（河）路繁常（陸奥・岩城） 七四句。

88 神住むや瑞穂の国の民の春

杉浦勝成

〔句意〕神がお住まいになつているのでしようか、瑞穂の国の民たちが新春を寿いでいます。

〔解釈〕◇神住むや 歌例に「三尾の神住むと聞きてぞいり江なるなぞふねす多て日数へぬらむ」（津守国基集・一二六）がある。◇瑞穂の国 瑞穂は瑞々しい稲穂。瑞穂の国は瑞穂が実る国のこと。日本国の美称。歌例に「あし原や瑞穂の国をもる山も豊のあかりのおもしろきかな」（夫木抄・一四一三〇・大江匡房）などがある。句例は見当たらない。◇民の春 庶民にとつての新春。句例に「今朝しるや年中行事民の春」（寛文二年（一六六二）歳旦発句集・八八七・立圃）、「祝へ穂長麦にふたまた民の春」（寛文二年（一六六二）歳旦発句集・一二三七・貞祐）などがある。

〔作者〕杉浦勝成（武蔵・江戸） 二四句。

89 君と祝ふ舌ながき代や民の春

高井立志

〔句意〕嘘偽りのない世の中をあなた様と祝うことです、民にも新しい春がやって来ました。

〔解釈〕◇舌ながき代 長広舌をいうか。長広舌は仏の三十二相の一つで、仏の舌が広く長いことから嘘偽りのない相をいう。和歌、俳諧ともに用例は見当たらない。

〔備考〕寛文六（一六六六）年の『歳旦発句集』（一一〇三）に同一句が載る。

〔作者〕高井立志（武蔵・江戸） 立圃門、松楽軒（大系図）。五句。

90 今日を知りてとふは礼なり宿の春

小西似春

〔句意〕今日という日が元日だと知っていても「問う」ではないが、「訪う」ことが「礼」だということです。あなたの宿を訪問し新春の挨拶を申し上げます。

〔解釈〕◇今日を…礼なり 『論語』「八佾第三」に、孔子が魯の大廟で周公旦の祭りの介添をした際、その進行について先輩に事ごとに質問したので、それを見ていた人が、孔子は本当に礼を知っていると云えるのかと評したことに對して孔子が、これこそが礼なのだと言ったという話が見える。表面的には一通り知っていることであっても、一つ一つ問うて知識を深めることが、本当の礼であるということであろう。「今日を知りてとふは礼なり」は論語のこの話に基づくもの。元日であることを知っていて「問う」ではないが、あなたの所を「訪う」という意か。◇宿の春 「宿」は自分の家のこともあるし、宿泊先の家のこともある。また、旅の宿ということもある。「宿」で迎える新春のこと。以下、94まで「宿の春」が続く。句例に「歳とくを得たり賢こし宿の春」（崑山集・一三六・

ノ身）、「大黒は柱にたつや宿の春」（寛文十一年（一六七一）歳旦発句集・一三九二・友貞）などがある。

〔作者〕小西似春（山城・京） 六〇句。

立春遅かりける元日

91 今日たつは半造作か宿の春

淳寧院白話

〔句意〕今日はまだ立春ではないので、春も「半造作」なのでしょう、この宿に新しい春を迎えました。

〔解釈〕◇今日たつ 「たつ」は「立つ」と「建つ」を掛ける。句例は「今日たつや春の中にも一の」（慶安元年（一六四八）歳旦発句集・四九三・清長）、「今日たつや春の悦びの二七夜」（寛文二年（一六六二）歳旦発句集・九〇八・可頼）など多数ある。◇半造作 建物がまだできあがっていないこと。「たつ」、「宿」は縁語。「立春」が遅い年の元日の句なので、まだ立春になっていないことを「立つ」の縁で春が「半造作」とした。句例に「かつ咲くは半造作か家桜」（犬子集・四四八・孝晴）、「敷きし畳のかたびくな体／山荘も半造作な小倉山（玄康）」（鷹筑波・八六五／八六六）などがある。

〔作者〕淳寧院白話（山城・京） 季吟系、東本願寺御門跡大僧正琢如上人（大系図） 三句。

92 熊よばば御座らふかこの宿の春

中堀器音

〔句意〕熊を呼んだらなら我が家に来て下さるだろうか。この新春を迎えた宿に。

〔解釈〕◇熊よばば 熊を呼んだなら。まだ熊は冬眠中である。熊と春を結んだ歌例に「ふりつもる深山の雪をうつほ木に住むてふ熊も春や待らん」（実量愚詠草・一三七）、後代の句例に「洞熊のまづ覗くらん春の

艶」(蕉門名家句集〈西の雲〉・一五・丈草)がある。◇御座らふか 来て下さるでしょうか。まだ巢穴にいる熊も、新春を迎えて春めいた我が家になら来て下さるだろうか、という意か。句例に「鏝屋殿わざと呼ぶだと御座らふか(大坂独吟集・六一三)、「言の葉の紅葉はかうも御座らふか」(誹諧当世男・四七四)がある。

〔作者〕中堀器音(撰津・大坂) 一一句。

### 93 羽子板の絵のまねすなり宿の春

江戸住高政

〔句意〕羽子板の絵を真似ているような、おめでたい正月をこの宿に迎えました。

〔解釈〕◇羽子板の絵 羽子板の絵を詠んだ句例に「羽子板のうらや千歳の鶴とかめ」(生玉万句・三三四・可目女)、「はご板の絵様榮花や宿の春」(玉海集・一六七・季政)などがある。羽子板には『生玉万句』の例のように、めでたい絵柄を描く。◇まねすなり まねをするようだ。句例に「いかなれば鸚鵡は人のまねするぞ」(新增犬筑波集・九一二・貞徳)などがある。

〔作者〕高政(武蔵・江戸) 一一句。

### 94 宿の春に老を免許の札もがな

北村季吟

〔句意〕新春を迎えた御屋敷に、年老いた人も今日は出入りを許可するという御札があるとよいのですが。

〔解釈〕◇老を免許… 老いた人も特別に許す、の意。老人はめでたい席にふさわしくないが、新春の今日は特別に出入りを許可するという架空の「札」をいう。「免許」を用いた句としてわずかに「宿札のこる夢の故郷(益友)／伏見山諸役免許の跡とめて(均朋)」(大坂桜千句・九五二／九五三)、「家桜風を免許の札もがな(鷹筑波・一四一六・信相)があ

る。◇札もがな 札があればよいな、の意。句例に前掲句のほか、「屋柱に家内安全の札もがな」(続山井・三五八三・政信)などがある。

〔備考〕寛文八(一六六八)年の『歳旦発句集』(一一〇五)に同一句が載る。

〔作者〕北村季吟(山城・京) 一三九句。

### 95 御免あれ杖つく法師も花の春

川崎宗斎

〔句意〕お許し下さい。場にそぐわない杖をついた法師も花の春を迎えました。

〔解釈〕◇御免あれ お許しくださいの意。人に何かを頼むときに使うことが多い。句例に「御免あれ赤地の錦の置頭巾」(生玉万句・二五)などがある。◇杖つく 句例に「百敷の御事はじまる元日に／杖つく老も若やぎにけり」(毛吹草・二三一九／二三二〇)などがある。◇法師 春を樂しむ法師を詠んだ句に「春駒にのり得て遊ぶ法師かな」(崑山集・二〇一八・快笑)などがある。

〔作者〕川崎宗斎(撰津・大坂) 始め貞徳門、後に立圃門、友直、川崎氏、通称源左衛門、号宗立、浪花人(大系図)、連歌師川崎屋宗斎(名誉人)、一一句。

### 96 懐紙なら身や二折の花の春

松山玖也

〔句意〕懐紙で言うなら二つ折のように腰の曲がった私にも、新しい花の春がやって来ました。

〔解釈〕◇懐紙 歌会・連歌の会・句会などで作品を記す和紙のこと。半分に折って使われた。句例に「二折の懐紙かあふぎ裏表」(崑山集・四二五八・友正)などがある。◇身や二折の 前書に「四十九の歳に」と記し

であることから、私の身が懐紙のように二つに折れる、つまり腰が曲がっているさまをいう。「折る」は「花」の縁語。

〔作者〕松山玖也（撰津・大阪） 四五二句。

97 代は長しながしを立つる花の春

廣瀬自睡

〔句意〕あなた様の御代は長く続くことです。「長し」ではないが、夜更けに「流し」を使って正月用の花を生けると、花の春がやって来しました。

〔解釈〕◇代は長し あなた様の御代は長い、の意。「代」は「夜」を掛けるか。「夜は長し」の歌例に「夜は長し誰とあかさ山鳩の尾上の鹿の声し絶えなば」（逍遊集・一六五〇）などがある。◇ながしを立つる

「流し枝」を立てる、の意か。「流し枝（流し）」は、生け花において花型の基本・中心となる役枝の一つで、水面と平行に横に長く出した形の枝をいう。横にして用いる「流し」を「立つ」、つまり「立花」としたことが眼目か。

〔作者〕広瀬自睡（尾張・名古屋） 七句。

98 世ざかりや花なき里も花の春

吉田聞也

〔句意〕盛世の時代を迎えたことです。「盛り」とは言うもののまだ花の咲いていない里にも、花の春がやって来しました。

〔解釈〕◇世ざかり 盛世のこと。栄華をきわめること。また、その時期。句例に「世ざかりや上したじたも花の春」（慶安元年（一六四八）歳旦発句集・四七七・立圃）、「世ざかりや時しもわかぬ花の春」（寛文十二年（一六七二）歳旦発句集・一四八二・重尚）などがある。「盛り」は満開の桜を連想させる言葉。◇花なき里 まだ花の咲かない里、の意か。歌例に「霞たちこのめもはるの雪ふれば花なき里も花ぞちりける」（古今集・春歌上・九・紀貫之）などがある。句例に「そは切や花なき里も花鯉」

（時勢粧・四二七・梶山保友）などがある。

〔作者〕吉田聞也（陸奥・岩城） 八七句。

99 大年や闇にこゆれど花の春

大村可全

〔句意〕大晦日が来て暗闇の中に年を越えたけれども、はっきりと花の春を迎えたことがわかりました。

〔解釈〕大年 一年の最終日。大晦日。句例に「大年や後見に立つ今日の春」（寛文六年（一六六六）歳旦発句集・一〇五五・立圃）、「大年は名残の裏か月もなし」（続山井・五一五三・道之）などがある。◇闇にこゆれど 暗闇の中、年越しをしたけれど、の意。歌例に「梅の花にほふ春べはくらぶ山闇にこゆれどしるくぞ有りける」（古今集・春歌上・三九・紀貫之）があり、本歌と見なせる。本句は、これを踏まえて暗闇の中で新年を迎えたけれど、梅のように匂わなくても、はっきりと花の春の訪れがわかったと詠む。この言い回しは俳諧の例には見当たらない。

〔備考〕延宝六（一六七三）年の『歳旦発句集』（一五六二）に同一句が載る。

〔作者〕大村可全（山城・京） 季吟門。大村氏、通称彦太郎、白木屋（大系図） 彦太郎（玉海） 季吟門（貞徳誹諧記） 八句。

100 掛鯛や鼻をつがへて花の春

山田素雲

〔句意〕掛鯛の鼻を縄で結び合わせた飾り物を掛け、花の春を迎えることです。

〔解釈〕◇掛鯛 正月飾りのひとつ。二匹の塩鯛をわら縄でつがえて、かまどの上や門松に掛けたもの。句例に「かけ鯛も口でいふなり祝ひ事」（寛文元年（一六六一）歳旦発句集・八五七・和年）、「頭ふたつぞ行あたりける／掛鯛の縄をも強くしめぬらし」（宗久）（鷹筑波・二七五二／

二七五三) などがある。◇鼻をつがへて 二匹の塩鯛の鼻を縄で結び合わせるさま。「つがふ」の歌例に「氷ある玉もの床や寒からしつがへる鴛の羽をかはして」(永久百首・六三〇・貞成親王)、句例に「騮といふ字なりやつがふきほひ馬」(続山井・二八六〇・慶命) などがある。

〔作者〕 山田素雲(山城・京) 季吟門。佐治氏、晩年に吟鳥(大系図)、一句。

※(よしだ・けんいち/いわき明星大学大学院人文学研究科日本文学専攻)

※(まつもと・あさこ/日本文学)